

中央教育審議会 初等中等教育分科会 デジタル学習基盤特別委員会
次期ICT環境整備方針の在り方ワーキンググループ

令和5年9月1日
第2回デジタル学習
基盤特別委員会
資料 2

設置目的の概要、検討事項

1. 設置目的の概要

GIGAスクール構想を踏まえた成果や課題等を検証し、特に専門的に議論すべき事項について審議をするとともに、引き続き教育のICT環境整備を進めていくために、令和7年度以降の新たな学校におけるICT環境整備方針の策定に向けた検討審議を行う。

2. 主な検討事項

- (1) 次期ICT環境整備方針について
- (2) その他

検討経緯

令和5年 6月8日 第1回WG開催

※第2回は秋以降の開催予定

委員構成

石井 一二三	八戸市立江陽小学校教頭
小高 美恵子	戸田市教育委員会学校経営アドバイザー
片山 敏郎	新潟市立大野小学校校長
木田 博	鹿児島市教育委員会事務局教育部 学校ICT推進センター所長
柴田 功	神奈川県立希望ヶ丘高等学校校長
◎高橋 純	東京学芸大学教育学部教授
中川 哲	港区教育委員会教育情報参事官 /立命館大学OIC総合研究機構客員教授
中村 めぐみ	つくば市立みどりの学園義務教育学校教頭
○堀田 龍也	東北大学大学院情報科学研究科教授 /東京学芸大学大学院教育学研究科教授
水谷 年孝	春日井市教育委員会教育DX推進専門官 (10名)

(五十音順・敬称略)

(◎主査、○主査代理)

役職は令和5年4月現在

GIGAスクール構想の成果と課題に関する意見

（成果）

- 子供の日常的な学習基盤としての端末の活用が進み、単線から複線の学びに、一斉授業から子供が自ら情報を取りにいき、協働して頭をフル回転させる授業に、学びの姿が変わってきている。クラウドと1人1台端末という学習基盤があったからこそ実現したものであり、この整備が継続され、新たな学びの姿をさらに浸透させていくことが最重要。
- 学習者主体の授業に変わりつつあり、学びの転換が起きている。多様な学びの形が生まれ、不登校の児童生徒も参画してのグループ活動など、多様な形での学びの保障も可能になってきている。
- 1人1台端末というツールの整備がスイッチとなって、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実という理念の実現が非常に進んできた。
- 学びが自立的、創造的、探究的となり、チャレンジを行い易くなっている。臨時休業中の学びも保障できた。
- クラウドを活用して校務と研修を行うスタイルは、子供の学びのスタイルの相似形。校務と研修のスタイルをクラウドベースに変えることが、先生方の授業のイメージづくりになり、それによって学びも変わっていくのではないかと。

（課題）

- 現行の学習指導要領や「令和の日本型学校教育」答申が目指す学びについて十分な理解が追いついていない自治体では、ICTが学習の基盤になっておらず、活用率が上がっていない。標準仕様に沿って整備はしたものの、ICTは学びを変える手段とは位置づけられておらず、既存の学びへの付け加えという考えで運用されている。
- 端末やネットワークの整備に精一杯で、持ち帰り学習のイメージが十分でなかったため、セキュリティ、フィルタリング、利用時間の制限など、子供たちがどこでも安全に利用できる環境の整備が不足した。
- プログラミングについて、Scratchの利用率が伸びているが、日本の社会的、国際的な立場を考えると、10%程度のシェアがあっただけで、もっと伸ばしていく必要。

今後の整備に向けた意見

（総論）

- 中教審の他の部会やWGの動きも踏まえ、今後どのような学習活動が望まれているのか、一步先の教育のステージをイメージして整備方針を検討していくことが必要。
- 端末整備の指針やスペックが出て、それに合うものを整備して終わりではなく、これからの新たな学びや仕事の仕方をどんなインフラで支えるか、そのためにどんなネットワークが必要で、セキュリティポリシー等をどう判断すればよいかなど、運用面を含めて総合的に示していくことが大事。
- GIGAスクール構想への「対応」という言い方に象徴されるように、「既存の学びの形にICTを付け加える」という捉え方ではなく、校務や研修等も含め、あらゆる学校教育のレイヤーにデジタルが溶け込み、もっと質が高く、より働きやすくなるような、デジタル学習基盤を検討していく必要。

（PC端末等）

- 新しい学びの姿を浸透させていくためには1人1台端末の学習基盤の継続が最重要。
- 少しコストを削減したりすることで、折角生まれてきた自立した学習者を育てるクラウドベースの授業が旧来型のものに後戻りするようなことは絶対にあってはならない。
- MEXCBTやデジタル教科書なども入ってきている中で、端末がボトルネックになってはならず、予備機や故障時の費用も見えていくことが必要。
- 標準仕様でしか整備できなかったが、それがかえて良く、学びが変わった部分がある。標準仕様はとても良く考えられたものだと思う。
- 子供の可能性に蓋をしない学びを実現可能にするためには、一段上がった環境整備も視野に入れたい。
- 1人1台端末に加え、負荷の高い処理を行うことのできる、ある程度の高性能な端末等をコンピュータ教室に配置することも考えられる。
- 高校の「情報」でのデータ分析、コンテンツ作成には、高性能な端末がコンピュータ教室で使えるという環境も大事。
- 高校の端末整備は自治体負担と保護者負担で二分しており、費用負担の在り方について比較検討が必要。高校においてBYODを進める場合は、経済的に厳しい家庭の支援も同時に進めて行くべき。

次期ICT環境整備方針の在り方ワーキンググループ（第1回）の主な意見③

（サポート体制、ネットワーク、その他）

- GIGAスクール運営支援センターの費用の継続的な担保が必要。技術進展により設定等が高度化する中、自治体の担当者や学校職員の負荷が極めて大きくなっている。職員の異動等によって年度更新業務が滞ることも多く起きており、運営支援センターによる組織としての支援が必要。
- ネットワークのトラブルは、校内のアクセスポイントや、学校からのネットワークの帯域等に起因するもののほか、共同編集等のための（クラウドの）サービス側に原因がある場合もある。
- 1人1台端末を使った学びが深まる中で、ソフトウェア等に係る経費の負担感が出てきている。
- 学習系、校務系を一元化した校務の環境を標準とすることで、教育データの利活用、子供たちのデータのダッシュボード化が進むことを期待。